

令和4年度 特別展 展示予定

(令和4年度当初予算の成立を条件とします)

※観覧料の()は20名以上の団体料金。中学生以下、障害者手帳をお持ちの方と介助者1名は無料。

展覧会名・会期・観覧料	概 要
<p>市制施行100周年・開館20周年記念特別展 相原求一郎展 アンコール</p> <p>7月16日(土)～9月4日(日) 44日間</p> <p>大人500円(400円) 大高生250円(200円)</p> <p>目標観覧者数：5,000人</p>	<p>2018年から2019年にかけて川越・札幌・軽井沢を巡回した相原求一郎展をきっかけに相原芸術に魅了されたファンからのアンコールの声に応え、当館の所蔵作品で改めて相原の画業をたどる。近年コレクションに加わったスケッチやデッサンの公開を兼ね、50点以上を展示する。当館の相原作品をこれほど一挙に公開する展覧会は開館以来初となる。</p> <p>なお、本展は当初令和2年度冬季に開催予定だったが、新型コロナウイルスの影響による臨時休館により公開しないまま終了となった。</p>
<p>市制施行100周年・開館20周年記念特別展 小茂田青樹展</p> <p>10月22日(土)～12月4日(日) 39日間</p> <p>大人600円(480円) 大高生300円(240円)</p> <p>目標観覧者数：8,000人</p>	<p>川越市の市制施行100周年と当館の開館20周年を記念し、川越が誇る日本画家・小茂田青樹(1891-1933)の軌跡をたどる。</p> <p>川越の中心地に生まれた青樹は、17歳で上京し、今村紫紅や速水御舟ら気の合う仲間とこれからの日本画を模索する青春期を送った。その後、再興日本美術院展への挑戦をとおして画家としての確固たる表現に目覚めてゆくが、一層の活躍を期待された矢先に、41歳という早すぎる生涯を終えた。自然観照に基づく写実性と装飾性の融合と、濃密な色彩表現は、唯一無二の個性として現在もなお高く評価されている。</p> <p>本展では、各時代の代表作を中心に画業の展開をたどるとともに、資料と実作品の検証から主に昭和期における作品制作の実態や川越の関係にも迫る。</p> <p>当館では開館1周年以来19年ぶりとなる青樹展。</p>

令和4年度 タッチアートコーナー 展示

予定

※観覧無料

テーマ・会期	概要
<p>第1期 コレクションから 橋本次郎と建畠覚造 同じ年に 生まれた二人</p> <p>3月30日（水）～6月19日（日）</p>	<p>当館のコレクションから、橋本次郎と建畠覚造の作品7点を紹介する。当館ガイドラインにより触察は禁止とするが、感染症の状況変化によりガイドラインが改定、触察が可能となった場合には、鑑賞者は手袋を着用すれば、すべての作品に触れることができるものとする。</p>
<p>第2期 奥村拓郎展</p> <p>6月28日（火）～9月19日（月祝）</p>	<p>彫刻家・奥村拓郎（1983- ）は木彫作品を一貫して制作する作家。しかし、黒系統で着色されたマチエールや、直線的でシャープな造形の抽象作品は、木彫の概念を覆す。当スペースに合わせた新作を中心に紹介する。</p>
<p>第3期 安部大雅展</p> <p>9月22日（木）～12月18日（日）</p>	<p>彫刻家・安部大雅（1974- ）の石彫を紹介する。さいたま市出身の安部は日本およびイタリアで石彫を学び、現在は国内の個展およびグループ展で活躍する。またアートプロジェクトを主宰する。石の作品だけでなく異素材を組み合わせた作品を制作している。</p>
<p>第4期 糸賀英恵展</p> <p>12月22日（木）～3月26日（日）</p>	<p>鍛金で作品を制作する糸賀英恵（1978- ）の作品を紹介する。多摩美術大学大学院を修了し、同大他で講師を務める。季節や時間のうつろいのなかに潜む生命の美を探求している糸賀のしなやかさと鋭さを併せ持つ作品をご覧いただく。</p>